
仮説 葉書き物語「第二章」

午雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮説 葉書き物語「第二章」

【Nコード】

N9660X

【作者名】

午雲

【あらすじ】

文明以前の時代。常春の島に住まう村人たちの物語り。火を発明した後、さて、今度は何を発明しますやら。そんな感じで行きたいと思います。相変わらず予定は未定。かしこ。

その昔 炎の英雄

隕石到来後の長い氷河期を耐え抜いて、ようやく迎えた活動の時。

火山から噴き出すマグマが、常春の島を祝福する。

島に在って最も高い御山、霊峰ウス・・・

その中腹に集落をなす、ここタテボーグ村。

村の長は代々、タテボーグと名乗る事が、遥か大昔から定まって居た。

常春の島に火をもたらした父娘、ア・リタとア・キラ。

熊をも恐れぬ男、ア・リタの名声は殊に高まった。

「畏れながら次の長に就くのは、炎の英雄ア・リタに違いない」

「うむ」

「そうじゃ、そうじゃ」

タテボーグ村の住人たちは早くも噂しあった。

ア・リタ、彼の右腕には、

それ炎と見間違みまちがう痣あざが付いて居たからである。

村の男子の間では、腕にわざと火傷やけどを負って、

思い思いに痣を着ける事が、ひそかにお約束とは成りつつあった。

片や、娘のア・キラも、やはり英雄と見なされるように成った。

彼女は髪をおろし、ヒマつぶしに三つ編みして首に巻きつけて居たのだが、

その髪型が、いつしか村娘たちのお約束の髪型とは為ってしまった。

キラ本人は、もう止めようとして居たのに、

気がつくくと、

「ア・キラ式。」

として、自分以外の女の子は皆、編み毛に凝って居た。

「へびみたいで、気持ち悪くない？」

キラが注意すると、

「ア・キラ、あなた、その名前、禁句よ！」

「あからさまに口に出しちゃダメなのよ！」

「名を呼ぶと呼ばれたかと思って本当に近寄って来るんだから！」
逆に、みんなから叱られてしまった。

(変なの・・・)

(そんな髪型してたら、つられて出てくるんじゃない?)

言い返したくて、口がむずむずしたけれど、

その台詞は、胸のうちだけに留めておく、キラだった。

(くっく)

その壱 炎の英雄（後書き）

物語りオンリーで行きます！よろしくお付き合い下さいませ。かしこ。

その二 巫女と従者

ア・キラのもとに、おな長の洞窟からの伝言が届く。

「んにゃ」

やってきたのは、ヤ・ニコ。

巫女サ・ヤカの従者ヤ・クラになつく猫だ。

猫語も通じるこの時代……

ア・キラは、巫女サ・ヤカからの招きとさ覚って、

ヤ・ニコと共に出かけた。

長タテボーグの洞窟……

その戸だけは平らかな一枚岩を用いてある。

ヤ・ニコが呼びかけるまでも無く、

従者ヤ・クラに見守られて、

巫女サ・ヤカが自身、表で待って居た。

「キラ、よく来たわね！」

「ヤカ姉、何の用なの？」

二人は幼馴染の間柄なので、何の気兼ねも無いのであった。

「水浴びよ、水浴びに行こうと思って、ー」

「それでそんな恰好してるの？ヤカ姉」

「そ、そうよ・・・」

サ・ヤカ、彼女は髪のをまとって、

およそ巫女らしからぬ装いをして居た。

「ヒロイン・キラがついて居れば、安心よね？外へ出歩いてもー」

「ヒロイン・キラ？」

「みんなそう呼んでるわ、もう誰もキラ、あなたには礼をするでし
よう」

「そうなの？」

「だってあの御山から生きて帰って来たんだもの。勇気のしるしに
は充分よ！キラ。」

「そうですとも！ヒロイン・キラ。」

従者ヤ・クラも一緒になって笑みをたたえる。

「・・・でも、オオカミには勝てないわ」

キラは坂の下、遠くへ目をはせる。

「昼間はオオカミよりヒトよ。わたしにとっては、」

ヤカ巫女が身震いの仕草をしてみせる。

そう、千年に一度の美女と謳われる彼女にとっては、

盛りのついた男共のほうが余程、恐ろしい存在なのであった。

「本当は怖いんだけど、清水に身をひたさないと調子でないのよね」

ヤカ巫女、彼女がいう調子とは、

つまり靈感のコトである。

「ヤ・クラだけでは不足ですか？ヤカ巫女。」

「あなたは私の前では無口だから正直、退屈なのよね」

大男たるクラを見上げて、唇をとがらす彼女。

「・・・役目ですからな」

クラはぶ然たる面持ち。

「来るなど言われてもお伴いたします」

「今日はよい・・・来るな」

(!?)

「そ、そんな・・・ヤカ巫女」

「来るでない」

「そ、そんな・・・」

(・・・)

(・・・仲良しなんじゃ、ない？このふたり・・・)

見て居て、キラは、そう思う。

結局、三人して、秘密の川へと出かけるのだった。

(つづく。)

その二 巫女と従者（後書き）

思いだすのに、ひと苦勞・・・（ウソ）。

序章の五以降を拾い読みして下さい。ーありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9660x/>

仮説 葉書き物語「第二章」

2011年10月28日13時27分発行